

人工種苗の放流効果調査（出雲海域）

（栽培漁業事業化総合推進事業）

清川智之

1 研究目的

出雲海域における放流マダイおよびヒラメの効果の検証と放流事業の普及啓発を目的とする。なお、この調査は出雲海域だけでなく、全県で調査が実施され、本場が石見海域で、栽培漁業センターが隠岐海域で調査を行う。また、各海域で県水産振興協会、および各水産事務所、水産振興課と共同で調査が行われている。

2 研究方法

漁獲統計調査の対象漁協は美保関町漁協から大社町漁協までの出雲海域の7漁協である。市場調査は当海域のマダイ、ヒラメをおよそ10%以上漁獲する沖底、小底1、2種などの漁業種を対象とし、恵曇漁協、大社町漁協、および松江魚市、境港魚市で調査を行った。また、ヒラメについては島根県水産振興協会が平田市漁協に委託した調査結果も併せて用いた。放流魚の確認は、マダイは鼻孔異常（鼻孔隔皮欠損）を、ヒラメは無眼側の色素異常を肉眼観察により行った。

3 研究結果

（1）マダイ

市場調査により延べ4,136尾のマダイを測定した。測定されたマダイの尾叉長は10～79cmの範囲にあったが、中でも尾叉長15～20cmの1歳魚が60%を占めており、例年と比較して高い割合であった。ついで尾叉長30cm前後の3歳魚が25%を占めた。そのうち、鼻孔異常魚は尾叉長19～58cmの個体で、計21尾が確認された。放流時の鼻孔異常割合から放流魚の混獲率は1.3%と推定された。これにより、当海域のマダイの総漁獲量は139.5トン、水揚金額は1億3,679万円で、このうち放流マダイは1.2トン、水揚げ金額121万円と積算された。各年級とも年級群全体に占める放流魚の割合は2%以下と低かった。

（2）ヒラメ

市場調査により延べ3,621尾のヒラメを測定した。本県のヒラメの制限体長は全長30cm（小底2種は25cm）となっているが、市場調査で測定されたヒラメの全長は小底2種では30～40cm、それ以外では40cm以上の個体が中心であり、ほぼ制限体長は遵守されていると判断された。無眼側色素異常魚（黒化魚）については、沖合底びき網が5.3%、小型底びき網1種が7.5%、小型底びき網2種が3.6%、その他の漁業（定置網・釣・刺網）では6.4%で、合計226尾が確認され、平均混獲率は6.2%と推定された。これにより、当海域のヒラメの総漁獲量は53.7トン、水揚金額は8,276万円で、このうち放流ヒラメは3.7トン、水揚げ金額560万円と積算された。ヒラメ放流魚は小型底曳網2種で比較的若齢魚が多かったものの、それ以外の漁法では若齢魚から高齢魚まで幅広く確認されており、当海域における放流ヒラメの生残率は高いものと思われる。

4 研究成果

調査結果は「平成13年度栽培漁業事業化総合推進事業マダイ、ヒラメ放流効果調査報告書」としてまとめられ、平成14年度市場調査担当者会議において報告される。また、島根県水産振興協会を通じて関係漁業者に報告される。